

# インドネシア、梱包枠製造が順調

## 倉庫も顧客層が広がる

東京港を基盤として港湾運送・物流事業を展開する第一港運(本社・東京都江東区)は、アジアを中心とした海外展開に力を入れている。海外拠点ではインドネシアのほか、タイやベトナム、韓国に自社拠点網を有し、着実な成長を目指している。

海外拠点で安定した事業を営んでいるのがインドネシアで、その中核となるのが2014年1月から同国第2の都市スラバヤで営業を開始した「第一港運インドネシア」。スラバヤの工業団地に製造拠点を構える日系農機具メーカー向けに鉄鋼製梱包枠を製作する

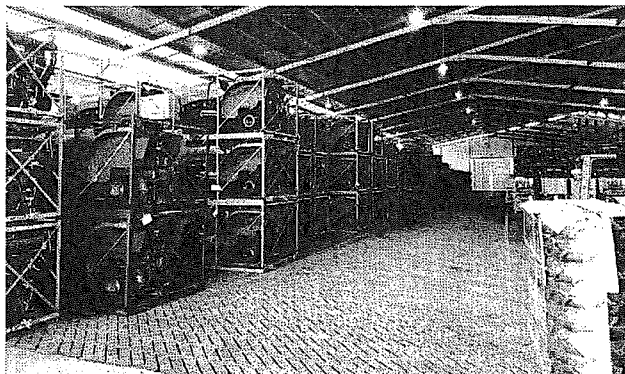
### 第一港運

ほか、部品加工なども手掛けている。梱包枠の製作では自動化を進めており、現在は大型自動溶接機2台と小型自動溶接機1台、レーザー自動裁断機など計4台のマシンを駆使して作業体制を効率化。鉄鋼梱包枠に加えて部品加工などにも活用している。

梱包枠を製造する同法人に加え、地元企業と合弁で16年に設立した「スゴロ第一港運」は倉庫事業を展開する。同法人は保税倉庫2棟と一般倉庫1棟を運営。非居住者在庫を利用できるPLB(保税物流倉庫)の免許を持つことで、強みとなる保税保管など付加価値

サービスを提供する。

これまでの顧客工場からの製品が中心だったが、昨年から自動車部品メーカーからの一時保管品なども引き受け



インドネシアでの保管需要は旺盛だ  
(写真は運営する倉庫内の様子)

るほか、数年前から輸入食品も取り扱うなど顧客層を広げつつある。

事業環境でコロナ禍前の状況に回復傾向にあるほか、主要顧客が生産能力を増強していることもあり、第一港運では「インドネシア進出時に設定した目標数値をクリアしつつある」(岡田幸重社長)とする。

今期のインドネシア事業は前年比で3割増収となっており、「コロナ禍の反動増という要素を除いても、少なくとも10%増以上の伸びを記録している」(物流事業部門管掌の山中浩亮常務取締役)。今後は「事業規模拡大を」検討しなければいけない局面に来るかもしれない、(投資判断など)しっかりと見極めたい(岡田社長)と話す。